2013.3
No.51

京都大学 総合人間学部広報

特集　ご退任を迎えられる先生方から

京大での日々 ……岡田　敬司……2
着手皆春也～総合人間学部は末広がり～ ……津田　謹輔……4
吉田山の麓、素晴らしき出会いと学問の日々 ……山梨　正明……6
京都大学の模範はヨーロッパ中世の大学 ……尾野　照治……8
定年を迎えて ……間宮　陽介……10
研究活動奮闘の思い出 ……前川　　覚……12

新任の先生方より

大学というハコとその“へり”について ……那須　耕介……14
リスボンの大地震と津波 ……合田　昌史……15

特集　ご退任を迎えられる先生方から

京大での日々

岡田　敬司（人間科学系）

学生のころ

昭和42年（1967年）に京大理学部に入学して以来、初任校の姫路短大の11年間を除くと、平成25年（2013年）に京大総合人間学部・人間・環境学研究科で定年を迎えるまで、35年間を京大で過ごしたことになる。

学生時代はかなり暗かった。最初の3年間は理学部に籍を置いていたが、1年の前期に少し勉強したのみで、秋からは政治の季節に巻き込まれてしまった。全く展望のないままにごそごそやっていたが、この調子では仕事にも就けないし、それより何より卒業さえも危ういことに気がついた。そこで教育学部に拾ってもらったのだが、それとて明確な展望があってのことではない。なんでもいいから、教育・研究職につくことができれば、私のようなものでも食っていけるのではないかと、かすかな望みを抱いていたのだ。いろいろあったが、上司の顔色うかがいをしなくてもいい職場だという思い込みは半分くらいは本当で、おかげで定年まで勤め上げることができた。

研究と教育

研究が面白いと思い始めたのは、姫路短大時代に在外研究員の資格でパリ第8大学に留学したころだ。フランス語もろくに話せない身としては決して楽な日々ではなかったが、生まれて初めて必死で勉強した気がする。

教育学をやっているという実感を持つようになったのは、京大教養部に採ってもらってからだ。それまでの半期ごとの授業では、ノートを作っても知識断片の寄せ集めで終わってしまったのだが、教養部では通年授業になり、ノート作りも構造化が必要になった。結果として、通年のノートを作れば一定の熟考を経た研究作品の原型ができることになる。以来、私の教育学研究は、このやり方を20年踏襲している。悪くはないと思っている。

総合人間学部生諸君に対する教育については、忸怩たるものがある。大学院教育と教養教育のはざまで、定年までついに腰が据わらないままだった。これは私が京大伝統の放し飼い方式に慣れっこになってしまっていたせいが大きいが、他の先生方の様子を見ていると、やはりひと工夫の余地があったなと思ってしまう。

死ぬということ

50歳前後に、研究室が近かった同僚が二人相次いで亡くなった。経済学の山下清さんと化学の岡與志雄さんだ。愕然とした。いつまでもあると思うなわが命、の感じだった。

1年半前に亡くなった国文の島崎健さんの場合は、親しくしてもらっていたのでずいぶんこたえたが、先の2人とは少し感じが違う。山下さんも岡

さんも予期せぬ病魔に突然襲われて、苦悶いかばかりかと感じたが、島崎さんは、好きな酒をやめるよりはまし、といわんばかりの覚悟の死だった。60代半ばでこの境地に立てるものかと思った。

私自身は、両親ともに30代半ばの若死だったもので、21世紀を生きて迎えたときは、本当に感慨深いものがあった。このたびの定年についても全く同様だ。

故　島崎　健さんと

友について

学生時代に群れる生活になじめなかったせいか、その後の人生もかなり自分勝手にやってきた。というか孤立気味に生きてきた。そんな中でわずかな数とはいえ懇意にしてもらった同僚、友人、学生の皆さんには本当に感謝の念に堪えない。何とか人並みに生きてこれたのは皆さんと家族のおかげだ。

一つだけ群れるのを楽しみにしている集まりがある。福竹会と称する寮の同窓会だ。入学当時の寮の自治会の委員長の福竹さんが若死したので、その供養も兼ねて毎年春分の日のあたりに集まっている。

公式の同窓会というものは嫌いなので、教育学部にも総合人間学部にも足場がない。何十年と京大にお世話になってきたが、最終的につながりが残るのは寮友のみということだろう。これも自分の選んだことだ。

ふつつかな教師だったが、総合人間学部生の、いや京大生の益々の活躍を蔭ながら祈っている。

（おかだ　けいじ）

ゼミのみんなと

着手皆春也
～総合人間学部は末広がり～

津田　謹輔（認知情報学系）

私は1992年4月教養部に着任し、半年後の10月総合人間学部自然環境学科環境適応論に異動しました。今でもこの名称が一番好きです。人環と組織替えのさい最後の学科長を経験しました。そして今わが学部に大津波が押し寄せている2013年3月後ろ髪ひかれる思いの中、退職します。

学部発足当時は学部長が総合人間学部の案内をもって企業回りをされたと伺っています。私もあちこち講演に行きますと、学部の紹介から始めるのが常でした。講演会に参加された方のご子息が当学部を受験したこともあり広報活動になったかと思っています。初めての大役は教務委員会で、最初の委員会に行くと突然、「先生が委員長ですよ」といわれ、何もわからないと辞退したのですが聞き入れられませんでした。その委員会の大きな役割は、総人最初の卒業生を送り出すことでした。新しい学部の最初の卒業生ということで、いろいろな事が決まっていない中での作業でした。なかでも卒業判定に苦労しました。卒業に必要な単位数は今と変わっていませんが、単位の区分が主専攻のAから確かIまで9項目に分かれており、指導教員も学生も皆戸惑っていました。最後の日は徹夜で全員の成績表を完成させたことを懐かしく思い出します。この卒業単位をAからIの9区分にしてあったこと。これが良くも悪くも総人を象徴しているように思います。すなわち総人は非常に理念を大切にする先生方がそろっている学部だと思います。新しい学部はかくありたいという思いで作りあげたのがこの9区分だったのでしょう。しかしあまりにも煩雑なので、理念と現実の折り合いをつけ、今は5項目になっています。そうして初めて送り出した第1期卒業生は88人でした。教授会で「88人が卒業していきます。総人は末広がりです。」と報告したのをはっきり覚えています。そのとき私は本当に総人の一員になった気がしました。そこから今までを総人のファーストステージとすると、今セカンドステージが始まろうとしているのかもしれません。それは学部の次の歴史を皆で作っていくわけです。総人は末広がりです。

私は代謝・栄養学、とくに糖尿病の食事療法を勉強しています。臨床も続けていますが、総人・人環では主に予防医学に力点をおいてきました。糖尿病のキーワードはインスリンというホルモンです。インスリンの発見、インスリンのアミノ酸配列決定、インスリン三次構造の決定、インスリンの測定、とインスリンをテーマにした研究で過去4つのノーベル賞が与えられています。このようなものは他にはありません。インスリンがいかに重要なホルモンで多くの研究がおこなわれているかを示しています。最後のインスリンの測定というのは、50メートルプールに満杯の水の中、そこに1滴落としたくらいの目薬の濃度を測定する技術です。Berson と Yallow 二人の研究者がその技術を開発しました。Berson はバーサンですが男性で内科医でした。Yallow はヤローですが女性の放

射線を専攻する物理学者でした。この全く異なる分野の研究者が出会い、ラジオイムノアッセイと呼ばれる全く新しい測定方法を開発し、ノーベル賞を受賞したのです。わが学部、研究科でも、異なる専門家の出会いが新しい研究につながることを大いに期待したいと思います。私は幸い同じ講座の先生方と多くの共同研究が行う事ができ、多くの成果を上げることができました。それらの先生方とは、一部共通する土壌をもっているが重ならないところももっているという関係でした。今まだ総人・人環はたとえはよくないかもしれないが泥水のようなところだと思っています。すなわち時々かきまぜると混じっているようにみえるけど放置するとまた砂と水は分かれてしまう。昔「総合人間学を求めて」という複数の異なる領域の教員が議論する授業がありました。最近では異文化交流の時間。このような機会が増えるといいなと思っています。

私自身は、多くの先生方から多くの影響をうけたと思っています。食事療法を専攻していると述べましたが、食事療法は代謝・栄養学というサイエンスの側面と食文化というアートの側面があると思っています。知らず知らずにそのように考えるに至ったのもその1つかもしれません。恩師である元総長井村裕夫先生から寝る前15分は専門外の本を読みなさいといわれたことがあります。これについては図書館「静脩」の「一冊の本」（Vol 48,No2,2011）に書きました。多くの先生方の著書を読ませていただきました。文字通り著者の顔が見える本でした。このことは今思うと大変すごいことだと思います。最近ではある先生の御著書からこれから人として、医師として考えなければならない課題を示唆していただきました。医学会はそれぞれの疾患の治療、予防についての研究に終始しています。しかしこれからは、死生観についてもっと考えなければならないという大きなテーマです。

さて21年の間に、私はこの学部に何か残せたでしょうか。学生さんに何か伝えることができたでしょうか。

着手皆春也。そう願っています。

（つだ　きんすけ）

吉田山の麓、素晴らしき出会いと学問の日々

山梨　正明（認知情報学系）

昔、読んだ筒井康隆のSFの短編に、時間がどんどん速くなり、最後には滝のように流れ落ちていくという話があったのを記憶する。これはSFの世界だけの感覚ではない。私の人生も加速がつき、あっという間に退官という時まで流れ着いた感じである。私は、1948年生まれで団塊の世代のど真ん中である。故郷は、静岡市の西隣りの焼津。黒潮が奥深く入り込んでくる駿河湾沿いの浜辺でのんびり育った。縁あって言語学の道に進んだが、大学に入った当初も、言語学の世界よりは文学の世界に憧れていた。文学青年くずれのような、よく訳の分からない学生だったような気がする。

私が言語学に興味を持ち始めたのは、学部学生の1960年代の終わり頃である。60年代の後半は、大学紛争の真っただ中で、キャンパスは学生運動により封鎖され、授業の一部は、大学の近辺の教会や喫茶店で行われることもあった。この紛争の時代、東京大学と東京教育大学（現 筑波大学）の二校は、大学紛争の激化のため、1年だけではあるが、大学入試が国立大学の歴史上初めて中止される事態に至っている。

言語学に関してはこの時代は、チョムスキーの生成文法理論が流行りだした頃である。しかし、私は意味論、語用論を基盤とする言語学に興味を抱き、反チョムスキー学派の生成意味論の論文を読み漁っていた。当時の私は、自律的な統語論を前提にする右派の生成文法にはなじめず、ラディカルな生成意味論に興味を抱いていた。文法だけでなく、意味論、語用論に興味を抱いていた私には、統語論を中心とする形式文法のアプローチ（文法ショーヴィニズムのアプローチ）をとる言語学は、学問的にも生理的にも性に合わなかった。また、当時は大学紛争の頃でもあり、時代的にも左派の生成意味論の方がその当時の時代精神に合っていた。現在、私が研究の基盤としている認知言語学は、生成意味論を背景として出現した言語学の新たなパラダイムである。この点で、私の言語観、学問観は、学生時代から首尾一貫して変わっていない。

京大の学生との言語学の研究に関する本格的な交流は、20年前の総合人間学部の言語情報論分野の学生と人間・環境学研究科の言語系講座の院生達との出会いから始まる。最近、私の言語系の研究室の名簿を開いたところ、これまでに卒業した学部生が20数名、院生が40名を越えていることに気づき驚いている。現役の学部生と院生も、京大の自由な雰囲気の中で研究を楽しんでいる。

この研究室で私が特に感謝したいのは、私が手取り足取り教えなくても、20年前から始めた言語学の研究会（「言語フォーラム」）、自主ゼミ、等を通して、先輩の院生が後輩の学部生と院生を指導してくれる点にある。もう一つ感謝したいのは、研究・教育の場における私との交流に際しての、彼等の寛容で温かな人間性である。私は、かなりマイペースで（時にハイテンションで）講義する教師である。総合人間学部や人間・環境学研究科で

の講義やゼミで、自分のペースで急に話題を変えて暴走したり、過激な冗談を言ったりして、学生達を自分の思う方向に引きずり回してきたのではないかと思う。にも拘らず、学問的にもまた人間的にも、よく今日まで辛抱強くつき合ってきてくれたと思う。実に、教師冥利につきると言える。

ただ、私にも、研究・教育の場における一貫した方向性がなかった訳ではない。私には、学問における交流や教育における交流の場を、まず第一に、人間的な交流の場として、常に明るく楽しいものにしていきたいという気持ちがある。学問的に研究の成果を上げていくのも大事なことではあるが、それよりも大切なことは、まず明るく楽しくお互いを人間的に高め合い、励まし合いながら成長していくことではないかと思う。この理想に少しでも近づけるように、私なりのサービス精神、奉仕の精神をもって、学生達と交流を図ってきたつもりである。総合人間学部と人間・環境学研究科の知の探求の場が、このような温かい人間的な交流の場であり続けるなら、これに勝る喜びはない。

退官を前にして、西田幾多郎は次のように述懐している。「回顧すれば、私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立った。黒板に向って一回転をなしたといえば、それで私の伝記は尽きるのである。」この西田独特の緩叙法（ないしは自嘲法？）には、何とも言えないユーモアとペーソスを感じる。西田の言うように、黒板に向かって一回転するだけで、大学における人生を閉じることができるならば、こんなに楽な職業は他にはない。しかし、この西田の言葉の背後には、彼が送った壮絶な思索の日々、研究と教育の日々が想像される。西田の壮絶な人生に比べれば、私の大学での毎日は、実に楽しく穏やかだった。西田のように哲学的に格闘した訳でもない。彼のように宗教的な体験と哲学的な思索を経て人生を生きた訳でもない。私の大学での毎日は、西田流に言えば、黒板を背にしての学生たちとの学問的な交流、同僚との人間的な交流、そしてパソコンを前にしての研究（?）の日々にほぼ尽きると言える。私が京大に着任したのは1980年の10月であるから、京大での研究・教育歴は33年（人生の半分以上）になる。素晴らしい学生と同僚に囲まれ、吉田山の麓で過ごした日々は、夢のような、あっという間の33年間であった。吉田のキャンパスでの素晴らしい出会いに心より感謝し、この出会いを心の支えとして、これからの人生を送っていきたい。

（やまなし　まさあき）

京都大学の模範はヨーロッパ中世の大学

尾野　照治（国際文明学系）

ヨーロッパ中世の「12世紀ルネッサンス」と称される時代に、農法と農具のイノベーションによって大きく食糧増産がはかられ、各地に都市が勃興して地方との商業活動が盛んになり、数多くの厳格な修道院が前世紀のグレゴリウス改革を拡大して精神を純化し、騎士が生まれて独自の文化を醸成し、古代ギリシャ文化を貪欲に吸収したアラビア世界から、双方の思想と科学がヨーロッパに導入された。

そのような時代背景のもとに、12世紀のヨーロッパ全体に知的探究心が大きく芽生え、原初形態の大学が少しずつ組織されていった。英語のuniversityはラテン語のuniversitasから作られた語で、それはunum（一つ）とverto（一定方向をめざす）から成る。従ってその当時のuniversitasは、「団体、組合」を意味しており、靴屋や布地屋などの組合名に使われていた。

中世の大学の前史に目を向ければ、古代ギリシャにプラトンの「アカデメイヤ」やアリストテレスの「リュケイオン」などの学園が、あるいはオリゲネスの「アレクサンドリア教理学校」やアウグスティヌスの「ミラノの学院」が、そしてその後はスコラと呼ばれる学院が存在した。しかし、それらはいずれも地方的かつnationalであり、高度な真理の探究を目指すというよりは、むしろ職能的な教育が中心であった。12世紀頃のスコラは宮廷付属学院、司教座聖堂付属学院、修道院付属学院の三種類があり、それらはいずれも官吏や聖職者を養成するための学校で、青少年が学びやすいように教室や寄宿舎が備えられていた。他方、初期の大学は青空の下、市場や橋のたもとで、あるいは間借りの粗末な部屋で講義が行なわれた。教師の名声を聞きつけ、知的探究心に衝き動かされてヨーロッパ各地から集まった学徒らは、職能教育を超えた高度な学問を目指し、veritas（真理）を自由に学ぶために、商業者のギルドに倣って独自の組合（universitas）を結成し、自由に学問をする権利を不動のものにしていった。

多くの大学は、ややもするとローマ教皇庁（教権）や皇帝・王侯（王権）の、聖俗双方の権力から干渉・利用されがちだったので、それらの外部圧力と戦うことによって自治権を獲得しなければならなかった。その戦いの最中に権力の干渉を免れるため、なかにはやむを得ず移動し分家の形をとって大学ができた例もある。例えばオックスフォード大学からケンブリッジ大学が、パリ大学からオルレアン大学が創られたように。さらに都市や王侯が権力伸張をはかって創った大学もある。例えばナポリ大学、サラマンカ大学、ウィーン大学のように。

時代によって揺れはあるものの、スコラとは異なる大学の最初の絶対理念は、「いかなる権力からも自由に、真理を探究すること」であった。ヨーロッパの大学はその当時すでに、真理探究のための国際組織というべきものになっていた。現代までの人類の学問的な進歩を背負ってきた大学の精神・制度・組織は、12世紀にその基礎が築かれた。

日本の大学は勿論、上記のヨーロッパの大学の理念から見れば、明治以降に創られたと言うべきである。しかし、701年の大宝令に日本最初の教育令があり、「都に大学（寮）を、地方に国学を置くべし」と書かれてある。さらに800年代に空海が建てた学校「綜芸種智院（しゅげいしゅちいん）」は、現在の種智院大学のルーツであるし、他にも9世紀には私塾として、藤原氏の「勧学院」、橘氏の「学館院」、和気氏の「弘文院」などがあった。15世紀以前に建てられた栃木の「足利学校」については、16世紀にヨーロッパから来日した宣教師ザビエルやバリニャーノ達によって、日本にも素晴らしい「大学」があると母国に報告されている。さらに江戸時代になると、昌平坂学問所や藩校などの官学をはじめ、有名な私塾として伊藤仁斎の「古義堂」、荻生徂徠の「渓園」、広瀬淡窓の「咸宜園」、緒方洪庵の「適塾」、吉田松蔭の「松下村塾」等が創られた。だがこれらの学校を、ヨーロッパ中世の大学と同列に論じることはできない。

明治維新後ほどなくして、「国家の須要によって」東京大学と京都大学が創られたが、前者は官吏養成を、後者は主に学者養成を目的としていた。その後間もなく帝国大学令が発布され、9つの帝国大学が建てられた。東京帝国大学（1886）、京都帝国大学（1897）、東北帝国大学（1907）、九州帝国大学（1910）、北海道帝国大学（1918）、朝鮮・京城帝国大学（1924）、台湾・台北帝国大学（1928）、大阪帝国大学（1931）、名古屋帝国大学（1939）―但し1947年に帝国大学制度廃止。

ヨーロッパ中世の大学が真理への知的探究心から自然発生的に生まれたのとは異なって、日本のこれらの大学は国家によって人為的に創られたものであり、その性格の半分は上記のスコラ型であると言ってよい。しかし、京都大学は滝川事件にも見られるように、日本の他大学よりももっと真剣に大学自治を守ってきた。1933年5月に鳩山一郎文部大臣は、京都大学法学部の滝川幸辰教授を、自由主義思想が過ぎるとして免官処分にした。その処分に抗議して、法学部教授団とそれを支援する学生達は、学問の自由と大学の自治擁護を主張して、激しい抵抗運動を起こした。ここで死守しようとした、自由な真理探究を保証するための大学自治は、その基礎がすでに12世紀のヨーロッパで確立したものである。この中世ヨーロッパ型の大学理念を、一世紀以上の間京都大学において教員も学徒もともに追求し、ひとえに学問的真理を探究してきたことに異論はあるまい。

ヨーロッパ中世も末期になると、国権の強大化にともない大学は次第に国家機関と化す。さらに宗教改革の後、大学はその宗教的色彩を明確にし、政治体制への隷属をいっそう強めることになった。今から考察すれば、そのような大学の変革はほとんど改悪であったことが理解される。ゆえにveritasを探究して止まぬ京都大学の関係者は、ヨーロッパで800年間にわたって培われてきた大学・学部の自治を深く意識しつつ、各部局構成員たち全員の十分な理性的議論を、そして遠く将来を展望する議論を尽くした上で初めて、京都大学の組織の変更・新編成を決定すべきである。近視眼的な拙速の道を選べば、800年の大学理念の伝統を突き崩し、大学での真理探究を大きく阻害するという重大な結果を招くことに、早く気付かねばならない。

（おの　しょうじ）

定年を迎えて

間宮　陽介（国際文明学系）

20年間の収支決算

関東にある前任校から京大にやってきたのが20年前の1993年。家族挙げて京都に引っ越す予定だったのが、子供の学校の関係で、単身赴任ということに相成った。単身赴任といっても週末は東京の自宅に帰るから、半単身赴任といったところである。往き来した距離は概算で80万キロ、月に行って帰ってくる距離よりもなお長い。JRの経営に微々たる貢献をしたと自負しているが、さて私にとっての収支決算はどうであったろうか。

当初は新幹線の車中で本を読む気力があったが、50台半ばから少々きつくなり、いまでは車中で居眠りすることが多い。物忘れがひどくなったのもあながち年のせいばかりとはいえないだろう。商売道具の本が、東京と京都の自宅、それに研究室の3カ所に分散しているのは致命的で、頭の中にあった本の在処、本の地図がしだいにごちゃごちゃになっていく。つい昨日までは、自宅の本棚のある場所にあったはずの本が、今日探すとどこにも見つからない。京都の自宅にもない、研究室にもない。隅から隅まで探してもどこにもない。たぶん幻覚だったのだ。かつて私がその本を読み、鉛筆で線を入れたと思っていたのは幻覚で夢の中の話だったのだ。

長いこと京都で生活しながら、神社仏閣を見て回ったわけでもなければ、祇園でドンチャン騒ぎをやったわけでもない。京都駅、大学、宿舎の3点を結ぶ生活に終始したのがこの20年である。無駄なお金を使い、無駄な時間を費やしたが、無駄には無駄の効用がある。家族には迷惑をかけたかもしれないが、京都で生活していると、開放感がある。京都特有のゆったりした時間の流れ。その中にある京都大学。収支決算はプラスとしないわけにはいかない。

思い出すことども

1人で生活していると、思わぬ失敗がままある。とくに時間に関する失敗がそうだ。センター試験の試験監督に当たっていると、前の晩は緊張でなかなか寝つけない。夜中の1時、2時になっても眠れないとき、さてこのまま床に居続けるべきか、それとも徹夜すべきか、と重大な選択をせまられる。やはり寝よう、そう決断しても、眠りにつくのは4時頃。これが失敗のもとで、熟睡しているからセットしておいた目覚まし時計のピコ、ピコという音は聞こえない。はっと目を覚まして時計を見ると、集合時間まであと1時間、あわてて着替えをし、ヒゲも剃らずに家を飛び出して大学に着くと、試験官はもう部屋を出ている。まだ試験が始まっていなかったから、事なきを得たものの、1人暮らしの悲哀を感じないわけにはいかなかった。

時間に関する失敗をもう1つ。1月末から2月初旬は学年末試験、卒論・修論の公聴会、院入試と、重要な行事が詰まっている時期である。ある年のこと、今日は何もない日だと思って家を出た。電車の中で新聞を読んでいると、欄外の日付が目に入った。2月X日、ええっと、X・・・日――X日！今日は修論公聴会、それも私の指導している

院生の公聴会の日ではないか。時計を見ると、開始時刻まであと30分しかない。次の駅でタクシーに乗り換え、大学に着くと、すでに10分経過している。さいわい副査の先生が進行役を務めてくれていたからよかったものの、もし終わっていたらと思うと、背筋がゾーっと寒くなった。

これからの京都大学

20年の京都大学での生活は楽しく爽快なものであった。このような教育研究環境を提供してもらったことに深く感謝している。総合人間学部、人間・環境学研究科の学生諸君との付き合いも私にとって大いに有意義であった。学生の皆さんにも厚くお礼申し上げたい。

私が大学に入学した年、大学はストライキに突入し、そして大学を定年で辞める年、大学は教養教育のあり方をめぐって揺れている。大学問題に始まり、大学問題で終わろうとしている46年間であった。教養と専門、流行と不易、大学はつねに二律背反の矛盾を抱えた存在である。私なりの大学観をいえば、大学は無駄の中に効用を、遊びの中に真剣さを求める存在である。京都大学の良さもこの点にあったと思う。京都大学の特色を失って欲しくない、特色を殺すことなく改革を進めて欲しい、というのは大学を去ろうとしている私の願いである。

（まみや　ようすけ）

伊東での合宿を終えて（2010年9月）

恒例のコンパ（2010年2月）

研究活動奮闘の思い出

前川　　覚（自然科学系）

入学以来45年の永きにわたって京都大学でお世話になってきましたが、今年３月で定年退職を迎えることになりました。

私は大学院理学研究科物理学専攻で量子固体ヘリウムの研究を行い、理学博士の学位を取得した後、昭和55年に教養部に助手として採用していただきました。教養部には大学院生も居ず、一人で連続して徹夜の実験を行うことも不可能なため、労力的には少し楽な物質の磁気的性質の研究にテーマを移しました。ところが与えられた部屋は１室のみ、しかも別の助手と同居で、私の研究実験を行うことはとてもできる環境ではありませんでした。実験に使用する重さ１トンにも及ぶ電磁石を設置するには、床が地面に密着した１階か地階の実験室が必要でした。そのような部屋を獲得するために、部屋の引越を３回もし、数年の年月を要しましたが、最終的に現在の吉田南３号館地下の実験室を獲得することができました。やっと部屋を獲得後、電磁石を設置するために床に縦3m横1m深さ0.5m程のピット（穴）を掘る必要があり、教養部の担当事務へ工事をお願いに行くと、地下には建物を支える鉄筋が入っている、それを切断して穴を掘るなどとんでもない、そんなことをすると建物が倒れると言って、取り合ってくれません。当時の教養部は教育中心で、研究については教員も事務もとても不慣れな状況でした。そんなことで諦めては研究など出来ない、不可能を可能にするのが研究者だ、と私は若気の至りで本部施設部に単身乗り込み直訴したところ、いとも簡単に「できますよ。造ってあげましょう。」と言ってくださり、実験室の完成にこぎつきました。当時は研究費も少なく、また市販の実験装置も少なく、多くの装置は自作しました。旋盤やフライス盤を使っての金属加工、溶接、配管工事、電気回路作成等を行ったことが懐かしく思い出されます。当時作った装置は今は活躍していませんが、現院生諸君の「邪魔だな」という顔を尻目に、「私の青春の遺物」と称して保存しています。

私は物質をマイナス273.15℃の絶対零度近くまで冷やし、原子や分子の熱的な振動運動をなくした状態で、物質に電磁波を照射して原子核からの反応信号を観測するという核磁気共鳴（NMR）法を用いて、物質の磁気的性質や原子間の相互作用を研究してきました。着任後、抱負を書くよう依頼されて書いた教養部報の文章の表題は「冷えた世界に踊り子を求めて」でした。極低温の世界での未知の現象を踊り子になぞらえ、その発見への意欲を記したものでした。

難関を突破して着任した京大助手でしたが、当時、同じ大学に就職するのは良くない、いろいろな大学、異なる環境で修行すべきだ、との声がしきりに聞こえてきました。よし、それなら日本の大学ではなく一層のこと外国の大学へ留学しようと考え、大学院での指導教官の助けも得て、フランスの物理学研究のメッカ、パリ南大学オルセー固体物理学研究所へフランス国費留学生として２年間留学することにしました。

実はこの留学にはもう一つの魂胆がありました。京都生まれ、京都育ち、結婚後も親と同居の自宅通勤、これでは家内にかわいそうかなとの思いがあり、２才の長男と６ヶ月の次男も連れて、花の都パリでの新婚生活のサービスのつもりもありました。外国好きの家内にとっては大満足の海外生活だったようですが、私にとってはなかなかしんどいフランスでの研究でした。受け入れ教授から、フランスに半年以上滞在するならフランス語で研究しろと言われたからです。昼間、研究を行った後、毎夜フランス語学校に通いましたが、旧フランス植民地からの学生や勤労者たちは文法はめちゃくちゃながら、日常語彙は豊富でともかくしゃべることが出来る、ところがこちらは第３外国語としてフランス語を学び、また留学に備えて復習したお陰で文法は分かっているつもりながら、会話は出来ない。フランスでフランス語がしゃべれなければ犬猫と同じ、と思っているフランスである。語学学校の先生からはボロカスに怒られ、

私は「物理の研究に来たのであって、フランス語の勉強に来たのではない。」と心の中で反論しながらも惨めな思いをしつつ、フランス語の勉強ために徹夜もしながら頑張りました。

それはさておき、フランス留学はやはり私にとってとても意義深いものでした。フランスの実験装置も自作の物が多く、日本よりも研究設備が進んでいるというものではありませんでした。しかし、物理学、科学に対する考え方が違い、研究への攻め方が的を得て適確であり、さすが科学発祥の地だとの思いを深くしました。また私は美術だけは小、中、高校といつも悪い成績で美意識がないと思っていましたが、さすがフランス、パリは世界の文化芸術美術の中心地、それらの美意識に開眼し、以後、凝ることになってしまいました。外国に住むことはやはり異なる考え方を学び、体感でき、若いときに経験することはとても大切です。

さて、助教授になって4年目、教養部が改組されて総合人間学部と人間・環境学研究科が創設され、若い大学院生と共に研究が出来るようになり、また新しい研究科棟も建設されて、充実した実験室もできあがったことはとても幸いでした。

私は物質の磁気的性質の中でも、原子間の相互作用が競合し、秩序化が押さえられるフラストレート磁性体を中心に研究を進めてきました。その過程で相互作用の競合は自然界のみならず、人間社会の中にも存在することに気付きました。いわゆる三角関係、三つどもえの戦いです。物理学の世界における三角関係の研究から得られた新奇な秩序状態や秩序形成過程の知見は人文社会科学にも適用可能な考え方であることに気付き、人環らしい研究が出来るのではないかと、国際関係や沖縄研究、哲学の先生方に呼びかけて文理融合の研究計画を立て、総長裁量経費を申請したところ、何と採択されるところとなりました。しかし、私のリーダーシップと時間不足で有意な成果を出すことが出来ず、残念に思っています。これは再度真面目に挑戦したいとも思っています。

物理学としてのフラストレーションの研究は興味深い成果を得ることが出来、やがて文部科学省科学研究費補助金の特定領域研究部門で1.4億円を獲得することが出来ました。最先端測定装置が購入可能となると共に、国内外の研究者とも頻繁に交流、共同研究が出来るようになり、さらに院生諸君へも研究活動費を十分に出せるようになったのは幸いでした。若い助教や院生たちと研究は活発に進み、重要な発見をして、記者会見、新聞発表という経験もさせていただきました。

フランスでの下宿はベルサイユ宮殿の近く、しかも大学教官は入場無料で、自庭のごとくしばしば訪れた。（1984年8月）

人環教員として研究、教育、運営業務を行うと共に、低温物質科学研究センター長を併任して組織の管理・運営を担い、さらに京大ボート部部長として学生の課外活動の支援も行うなど広範囲の活動に携わってきましたが、これらの活動を振り返ると、多くの人とのつながり、交流の大切さを強く感じます。私が充実感ある大学人生活を送ることができたのは、多くの人たちの支援、アドバイス、交流の賜物であり、感謝の念でいっぱいです。学生諸君も交流を広め、互いに考えを交え、多くのブレーンと呼べる友人・先輩・後輩を持ち、かつ自らも他人のブレーンになれるよう努力することが人生を楽しく豊かなものにしてくれるでしょう。若い諸君の成長、そして京都大学の発展を祈ります。

（まえがわ　さとる）

超低温NMR装置の前で研究室メンバー（2013年1月）

新任の先生方より

大学というハコとその“へり”について

那須　耕介（国際文明学系）

人が制度化された“教育”からしか学ばなくなったらどうなるか。

私たちが学校というハコのなかで学べることなど、ほんとうにたかが知れている。まして教室内で語られ、黒板に書きつけられ、教科書に満載されたコトバだけが知識だと思い込んで学校に通うなら、その人は大きな魚のいる釣り堀に糸もたれずに帰ってくるようなものだ。教師としてはまずいことなのかもしれないが、これを生業とするようになって以来、ますますそう思うようになった。

振り返ってみれば、自分がものを考える際の素地を養ってくれたのも、友人とのたわいのないおしゃべり、先生との短い立ち話、知人が催す演劇や音楽会、読書会、あるいは百万遍や熊野神社、下鴨界隈の古本屋めぐり等々の、教えようとする意図とも学ぼうとする意図とも無縁の、茫々とした時間である。なにより当時の京大周辺には、大学の“へり”のような場所が分厚くひろがっていて、そこに学者や学生だけでなく、普段は会社勤めや主婦をしている人、得体の知れない自称研究者や芸術家ふうの人、そして“活動家”と呼ばれる人たちの出入りする、研究会ともサロンともつかない有名無名の集まりがいくつもあった。もしかすると、それは私にとって言葉を最初から学びなおすような経験だったのではないか。そこでの見聞、驚きや憤懣や哄笑が、いつのまにか私の語彙と文法、好悪の尺度を後戻りのできない仕方で編みなおしてくれたのである。

大学というハコが、またそのなかでの“教育”が無意味だというのではない。むしろそれがあるからこそ、その周辺に濃厚な“へり”ができあがるのだ。いつまでも手許に置いておく必要のない教科書が大量に売買されるからこそ、それを（再）流通させる古本屋の商売が成り立ち、一般の書店では見かけない風変わりな書籍に出くわす機会が保たれる。小銭しかもたないが平日の昼間から暇をもてあます人が大勢いるからこそ、回転の悪い喫茶店が看板を下ろさずにすみ、そこで不穏な思いつきがゆっくりと育まれる。キャンパスの内外にひろがる“へり”は、たぶん多かれ少なかれ、そんな風にして充実させられてきたのだ。

大学（とその教室）というハコのあり方は、これまでさまざまに設計しなおされ、更新されてきた。この先もそうだろう。それが高邁な理念に導かれる場合もあれば、邪悪で馬鹿げた思いつきに翻弄されることもあるにちがいない。しかし私にとってそれ以上に重大に思えるのは、ハコのなかとその“へり”とがどのように持ちつ持たれつの関係にあるのか、ということだ。

誰にも“へり”のにぎわいを設計することはできない（そんなことをすればそこが“へり”でなくなるだけだ）。しかし、自分がハコのなかでつまらない話をすることが、どんな風にハコの外とつながっていくのか、また自分の考えることが、どんな“へり”のひろがりに支えられているのか。その可能性をときどきは思い出せるようでありたい。

（なす　こうすけ）

リスボンの大地震と津波

合田　昌史（国際文明学系）

2012年9月1日付けで、総合人間学部国際文明学系歴史文化社会論関係に着任した合田昌史と申します。専門は近世西洋史、とくに大航海時代のポルトガル・スペインです。

いま私は学生時代を過ごした学舎で教育できることに喜びを感じるとともに、不安に思うこともあります。それはこの地に活断層が走っており、かつ数百年間大地震がないことです。私は1995年阪神淡路大震災の震度7を経験しています。東日本大震災の影響もあり、ときおり近世のリスボンを襲った大地震と津波について訊かれることがありますので、ご挨拶に代えて、この点にふれておきたいと思います。

植民地ブラジルのゴールドラッシュでポルトガル史上二度目の黄金期を迎えていた1755年11月1日9時40分、大地震が首都リスボンを襲いました。震源はイベリア半島南西端から南西約200キロの大西洋海底、マグニチュードは8.5～9.0と推定されています。揺れがおさまった30～60分後、15mの大津波がリスボンに達し、さらに2波、3波が続きました。とどめは5日間にわたって首都をなめ尽くした火災でした。死者数はリスボンで3～4万人、リスボンをのぞくポルトガル国内で2500～4000人、スペインでは1200人以上、モロッコで約1万人、計約4～5万5000人と推定されています。ただし、死者数の推計はきわめて幅が大きく、3国の死者数計1万5000～2万人程度とする見方もあります。ポルトガルの損失額は当時のGDPの1/3～1/2（スペインでは20%以内）に相当したといわれています。

大震災はヨーロッパの知識人に衝撃を与えました。11月1日はカトリックの「万聖節」にあたり、教会に集った多くの信者が犠牲となったのですが、あるイエズス会士は地震を神の罰ととらえ、生き残ったリスボンの「罪人」は少なくとも6日間は僧院にこもるべしと説きました。一方、ヴォルテールはリスボンが悪徳の巣であるという見方を否定し、ルソーは人口密集などの都市構造に問題の一因を求めました。さらにカントは地震を倫理上の問題としてではなく自然現象としてとらえ地震学の論文を3編発表しました。ポルトガルの宰相セバスティアン・デ・カルヴァーリョ・イ・メロ（のちのポンバル侯爵）は区画整理などリスボンの再建に辣腕をふるいました。とくに中心地バイシャの建築に耐震構造をもたらした点で評価されています。

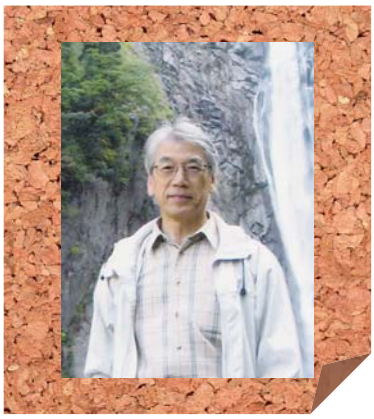
今日私たちがリスボン大地震から学ぶべきものは何でしょうか。そして地震が避けがたいこの国土においてどのような備えをするべきでしょうか。皆さんの意見を聞かせてください。

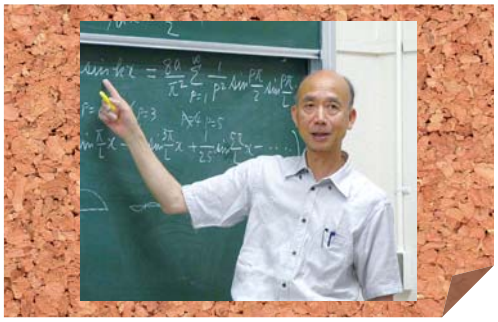
（ごうだ　まさふみ）

I uman S
ntegrated H tudies

編集後記

◆『総合人間学部広報』第 51 号をお届けします。教養教育とは何か、総合人間学とは何か、人間・環境学とは何かを問い続け、改革を成し遂げられてきた諸先生方が、今年もまたご退任されます。今、変革の嵐の中にあって、置いていかれるような不安に駆られずにはいられません。先生方の注がれてきた情熱と愛情を受け継ぎ、総合人間学部、人間・環境学研究科の一層の発展に邁進すべく、新たな気持ちで新年度を迎えたいと思います。 (N・S)





人間・環境学研究科
総 合 人 間 学 部 広報委員会